
月下の夜に

氷川 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下の夜に

【Nコード】

N4571C

【作者名】

氷川 流

【あらすじ】

月下の夜に走る「彼」。その先にある者、それは「陰」。「彼」の役目は「陰」をこの世から消す、唯それ一つ。「陰」は今まで一人でもあの世に送った者。「彼」はそんな「陰」をあの世に送る者。「彼」は「陰」を苦しめない。唯意識を無くし起こさない、それだけ。なぜなら「彼」の仕事は「殺す」事ではない、「送る」事だから。

プロローグ 「彼」

「もう…止めないか こんな無駄な鬼ごっこは」

「彼」は眼の前の男に冷徹な眼を向けながら言った。

「お…お前は…誰なんだ！？何故俺を…追いかけてくる！？」

「彼」はその質問には答えず、一歩、また一歩と距離を詰めていった。

「な…何だ？何が目的だ？金か？それ以外の物か？何でもやるから…」

そう言った男に向かって「彼」は足を止めて男に向けて言い放った。
「何でもやる…か お前が殺した人達がそう言ったときお前はどうした」

そう言うのと再び足を動かし男との距離を詰め始めた。

「なっ…何で…それ知っ… ああああ！！誰か助け…！！」

「彼」は何かを確かめたのかそれを聞いた瞬間足の早さを一気に早めた。

「あ…ああああ！！来るな！来るな！！来…」

男の口には「彼」の手の中に隠し持たれていた布が当てられた。そして含まれていた薬品によって男は気を失った。それを確かめると彼は着ている服の上着の内側に付けられていた細く普通の物より随分長い針を手にとった。そして「さよなら」と小さく呟くと「彼」は男の後ろの首筋にその針を突き刺した。男の顔から一気に生気が無くなった。

第一話 ヤミウチ ハヤテ

「おい見たかよ？朝のニュース」「ああ 見た見た」「あれだろ
また“裁き”だろ」「ああ」

今日もクラスはその話題で持ちきりだった。教室には色々なグルー
プがあつたがその話しかしていない。

「――裁き……か」

犯罪者が増加するこの世界。もはや警察の力も全てに行き渡つて
とはいえずむしろ一部の犯罪しか犯人検挙に至つてない、そういつ
た状況だった。しかし近年、過去に犯罪を犯し人を殺したことのあ
る犯罪者達が息絶えた姿で見つかる、そういった事件が多発してい
る。しかも見つかる場所は全国各地まばら、その上死因も違う、そ
ういった理由から警察は犯人特定おろか容疑者さえも絞れてない状
況にいた。唯一つ全てにおいて共通している点が“他殺”この一点
である。とはいえこの情報しか公開できない警察にたいし、ある人
々は早く犯人を検挙しなければ国が滅んでしまう、なにをやってい
るんだ警察は！？と裁きを行っている人々を否定的見て警察に対し
ても役に立ってない、と言つた意見を述べる。又ある人々は、警察
なんかより余程犯罪撲滅の役に立っている、警察より頼りになる、
と裁きを行っている人々を肯定的に見ていた。どちらにしても警察
に対して良い意見はなく、裁きに対し肯定的か否定的かによつて社
会は激しい議論になっていた。そんな人々が議論の中でつけた名前、
それが『裁き』。

「なあ今日のニュース見たろ 疾風はどう思う 裁き」

そう話しかけられた彼の名前は闇内 疾風、高二の学生である。

「どうって…良いとは……思えないさ」

「おまえはいつまで立っても否定的だな 考えてみる 何も役に立たない警察より何倍も役に立ってるじゃん 活躍してもらった方が犯罪が減ると思わねえか」

そう言われた。

「ああ…そうだな」

闇内は少し投げやりに答えた。

「なんだお前は この話になるといつもそうなるよな 実はお前が“裁き”をしてんじゃねえか」

「ははっそんなわけねえか」

そう言って今まで闇内に話しかけていた友人は去っていった。そいつがいった冗談混じりの一言を聞いて闇内は少し真剣な顔をして呟いた。

「俺が…か」

第二話 「彼」と闇内

その日闇内は一人で家路についた。元々他人と関わることがあまり好きじゃない彼だった。がそれでも友人と呼べる人間は何人かはいた。しかしこう一人で帰る日は今までにも度々あった。それは“裁き”の報道があった日、しかもある限られた手口での“裁き”が報道された日である。彼は一人で帰る日は寄り道もなにもせず真つ直ぐ家に帰った。そして何か考えているのか誰かに呼ばれても気付かないことが多かった。

一人であることと彼の家が学校に近いこともあって彼が一人で帰る日はすぐ家についた。彼は自分の鞆から鍵を出して家の鍵をあけた。彼の家は典型的なアパートである。彼はそんなありふれた自分の家に入って小さく「ただいま」と呟いてみたが返事はない。当然だ、彼の家には彼以外誰もいないのだから。家に誰も居ないのはほかの家族が買い物に言っていたからでも旅行に行っていたからでもない。彼の家には本当に一人しか住んでいない。闇内 疾風、彼一人しか

彼は冷蔵庫を開け中に入っていた残り少ないペットボトルに入っていたジュースを飲み干した。そして台所にあるキッチンマットをめくった。そこにはどの家にもあるような床下収納があった。彼はその蓋を開けた。そこには床下収納などなかった。そこにあったのはとてもその家にはあるとは思えない、いやどの家にもあるとは思えない機械があった。そこには液晶画面がついていて機械的に「暗証番号を入力して下さい」と表示されていた。それを見て彼は慣れた

手付きで8桁の番号を入力すると機械とは思えないように静かに開いた。そこには梯子がついていた。彼はそこに足をかけると床下収納に見せかけている蓋を閉め部屋は何事もなかったかのようにして下っていった。その先にはエレベーターがあつて彼はそれに乗り換え今までとは比べものにならない速さで潜っていった。

彼が潜っていくと最下層まで着いてエレベーターは止まった。そして目の前に見えるドアの前に立つと機械が作動し、指紋認証や瞳孔認証やとにかく警戒心が高かった。

十

数回に及ぶ検査の結果、彼の目の前の扉は開いた。そこにはありふれた日本の町の地下とは思えないような膨大な広さを持つ施設が広がっていた。彼は慣れたようにそこに入りある場所を指指して足を進めた。しかしその彼に話しかけてくる人がいた。

「よう疾風 見たぜテレビで おまえはもう少し派手に殺れよ」

そう彼に話しかけてきた。その人は彼より年上、17歳の彼から見れば十分オッサンといえる年だった。彼は面倒くさ言い返した。

「派手にやる意味なんて無いじゃないですか ただ殺せばいいんですから」

そういうとその人は何か言いたそうにしたが彼は相手に話す隙を与えず付け加えた。

「じゃあ失礼します あの人に用があるんで」

それを聞くとその人は話すのを止め、おう行つてこい、と言つてどこかへ行つてしまった。彼は気にせず足を進めた。

数分歩いたところに他の部屋と比べ一段と大きい部屋があつた。そこには『首領部屋』と書いてあつた。彼は少し緊張した面もちで「失礼します」と言つた。すると中から「入れ」と低い声で返ってきた。彼はもう一度、失礼します、と言つて扉を開け部屋に入った。そこには彼の方を向かず何かを見ている男がいた。大柄すぎる体型

でもなければ華奢な体型でもない男が。男は「何だ」と彼に言った。彼はそれを聞いて少し機械的に答えた。

「報告します 今日未明10年前強盗致死容疑で手配されていた白石 三木男を肅正しました」

そう言った。男はそれを聞くと少し頭をあげて言った。

「ああ おまえの針技にはいつも驚かされるな」

それを聞いた彼は「恐縮です」と少し頭を下げた。

そこにいたのは確かに闇内 疾風だった。しかし男の話に出ていたのは夜深い時間にいた「彼」だった。しかし闇内はそれを否定しなかった。ただ平然といつものように。なぜなら真実だからだ。彼は、闇内 疾風は、「彼」だから、だ。

そんな話は関係無しに二人の話は進む。

男はさらに彼に言った。

「では次の仕事だ 詳しいことはいつもの所に入れておいたから見
ておけ 以上だ」

それを聞くと彼は「失礼しました」と言いその部屋に背を向け男が
言った「いつもの所」に向かっていった。

彼はそこに着いた。そこには膨大な量の郵便ポストのような物があ
った。彼は慣れた手付きで自分の名前が書いてあるその中から一
つの大きめの封筒を手にとった。そこには彼が次に“裁き”を行う
相手についての情報が丹念に調べられていた。そいつの名前から行
き着けの定食屋までとにかく基本的なことは洗いざらい調べられて
いた。彼は仕事の度にいつも見てきたから一通り目を通したらさら
に細かいことを調べに行くつもりだったのだが彼は資料の中のある
一枚の紙に目が止まった。なぜならその紙は今までの資料にはなか
った物があつたからである。それを見て彼は呟いた。

「家族が…いる」

なぜなら犯罪を犯したらできるだけ地味に過ごしていった方が警察
に見つかからないからである。故に結婚なんて目立つことをした相手

を持つのは初めてだったのである。彼は少し立ち止まって考えたが足を進めその施設から出た。そして次の仕事について調査しに行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4571c/>

月下の夜に

2010年10月28日07時30分発行